助船有ケレ共、餘ニ多コミ乘ケレバ、大船三艘ハ目ノ前ニ乘沈メケル、然ルベキ人々ヲバ乘スレドモ、次樣ノ者ヲバ、不可乘ト制ケレ共、暫シノ命モ惜ケレバ、若ヤ〳〵トテ舟ニノラント取付ケルヲ、太刀長刀ニテ薙ケレバ、手折落サレ、足切折レテ、皆海ニゾ沈ケル、角ハセラレテ死ケレドモ、敵ニ組テ死スル者ハナシ、多ハ御方打ニゾ亡ニケル、

〔太平記十一〕五大院右衞門宗繁賺相模太郎事

義貞已ニ鎌倉ヲ定テ、其威遠近ニ振ヒシカバ、東八箇國大名高家、手ヲ束テ膝ヲ不屈ト云者ナシ、

〔徒然草上〕もろこしに、許由といひつる人は、更に身に玄たがへるたくはへもなくて、水をも手してさゝげて、のみけるを見て、なりひさごといふものを、人のえさせたりければ、ある時木の枝にかけたりけるが、風にふかれてなりけるを、かしがましとてすてつ、又手にむすびてぞ水ものみける、いかばかり心のうちすゞしかりけん、

〔陰德太平記五十一〕荒木村重屬信長幷村重討讐敵事

荒木善大夫、同善兵衞、佐伯庄右衞門、安部仁右衞門、山脇加賀守、同源大夫、星野新左衞門等ニ下知シテ、一人モ不殘討果ス、渠等ガ家人一人村重ニ切テ懸リケルヲ、村重時節白井河原ニテ蒙タリシ手疵ノイマダ愈ザリケレバ、矢手刀ヲニ刺ケルヲ、弓手ニテ拔打ニ切殺シケリ、

〔松屋筆記十〕手ふりをして

顯季家集に、霞たつ、くらまの山の薄櫻手ふりをしつゝなをりぞわづらふ云々、按手ふりをしては、手を振さま也、手をふるといふこと、袖中抄の都の手ぶりの條、また袋草子三の卷廿葉などにも見ゆ、

〔松屋筆記九十一〕手ぐすね引、天鼠矢、

保元物語參考三卷百十二丁右　爲朝鬼島渡りの條に、爲朝折節大事ノ所勞ヲシテ、八十餘日臥ケルガ、宜